

# 中国福建省の古塔

濱島正士

はじめに

- 一 遺構の概要
- 二 各遺構の形式手法
- 三 時代的変遷
- 四 日本の建築様式との比較

## 論文要旨

中国の福建省地方は、中世初頭の東大寺再建に際して取り入れられ、以後の日本建築に大きな影響を与えた大仏様ときわめて関係が深い地域とされている。その福建省に残る十世紀から十七世紀にかけて建立された古塔について、

構造形式、様式手法を通観し、その時代的変遷を考察するとともに、十二世紀以前の仏堂遺構も加えて大仏様との関連を探ってみる。

## はじめに

中国の福建省地方は、鎌倉時代初めの東大寺再興に際して俊乗房重源が採用した建築様式「大仏様」と関係が深いとされている地域で、日本建築との交流を考える上できわめて重要な関係にある。筆者は、平成三年十月に古都調査保存協力会（奈良国立文化財研究所内）が「伝統的文化財保存技術の調査研究」の一環として実施した福建省地方の古建築調査に参加し、多くの古建築を実見する機会を得た。調査は限られた範囲内で短い期間内のものであったが、塔については、十世紀から十七世紀にかけて建立されたものをかなりまとめて見ることができ、また大仏様の原形に関連するかもしれない十二世紀以前の仏堂も見ることができた。そこで、当地方の塔について構造形式・様式手法の流れを概観すると共に、仏堂も加えて大仏様との関連を探ってみることにしたい。

なお、中国の古塔に関する著作としては、代表的な遺構について写真と各個解説を載せた『中国古塔精華』（張馭寰・羅哲文、一九八八年）、『中国古塔』（羅哲文、一九九一年）、『中国古塔』（写真の代りにスケッチを添える、除華鏞、一九八四年）などがあり、福建省の遺構も何塔か含まれている。また、『中国古代建築技術史』（中国科学院自然科学史研究所編、一九八五年）には磚塔と石塔に分けて概要を記しているほか、福建省泉州地方の遺構については『泉州古建築』（泉州歴史文化センター編、一九九一年）に詳述されている。日本での論考としては、『中国建築史

叢考仏塔篇』（村田治郎、一九八八年）、『遼金時代の建築と其仏像』（竹島卓一、一九四四年）、「両浙の宋元古建築」（関口欣也、仏教芸術一五五・一五七、一九八四年）などがあるが、いずれも福建省の遺構についてはほとんど触れていない。

## 一 遺構の概要

現存する中国の古塔は、全体が木造でできているものは仏宮寺釈迦塔（山西省応県、一〇五六年）一基だけで、ほかは石造と磚造、あるいは軸部が石造・磚造で組物・軒を木造としたものである。福建省の古塔は把握できる遺構二十数基のうち磚造が二基、陶製が二基あるほかは石造で、石造のうち一基は組物・軒が木造であったらしい。形式については、中国の古塔には樓閣式（層塔）、密檐式（檐塔）・ラマ塔・金剛宝座塔のほか亭閣式（一重塔）・花塔などがあるが、福建省ではすべてが樓閣式である。<sup>(3)</sup> 平面形は中国では八角形が多く、ほかに方形・六角形・十二角形・円形があるが、福建省でも八角形が多く、ほかは方形と六角形が二基ずつある。これら福建省の古塔の建立年代については明らかでないものもあるが、宋代が多くて元代以降は比較的少なく、古いものでは五代が一基だけある。

このように、福建省では宋代に建てられた、石造で八角平面をもつ樓閣式の塔が多いが、細部を見ると、木造の手法を何らかの形で表わしたものが多く、日本の大仏様や禅宗様と似た手法もみられる。今回実見し

表

番号	名称	所在	建立年代	構造形式	軸部	組物	軒・屋根	内部構造	備考
11	(開元寺東塔) (鎮国塔)	泉州市	一二五〇年	石造、八角五重	礎盤、方立・貫、方立・貫、繫虹梁頭	木 一手に繪様肘木、隅尾垂木 二手先、詰組、一手通肘木、丸桁、拳鼻、壁付・	一軒垂木形、瓦葺形	心柱内廊式	
10	(開元寺西塔) (仁寿塔)	泉州市	一二三七年	石造、八角五重	礎盤、方立・貫、繫虹梁頭	鼻、隅尾垂木 二手先、詰組、丸桁、拳	一軒垂木形、瓦葺形	心柱内廊式	
9	天皇寺仙塔	連江県	宋代	石造、八角現二重	方柱	円形大斗、蛇腹形二段、 一手通肘木・丸桁、入八 双形二段			未調査
8	関鎖塔 (万寿塔、姑嫂塔)	晋江県	一二三二、 六二年	石造、八角五重	三柱式柱	大斗、蛇腹形二段	板軒	空筒状か	未調査
7	(崇福寺塔) (応庚塔)	莆田市	宋	石造、八角七重	扉・窓形 三柱式柱、頭貫・方立・	大斗、蛇腹形二段、丸 通肘木・丸桁、手先肘木	一軒垂木形、隅木、瓦葺形	実心	小規模
6	(広化寺塔) (釈迦文仏塔)	莆田市	一二六五年	石造、八角五重	礎盤、三柱式柱、地覆・方立・貫	大斗、蛇腹形二段、丸 桁、一手通肘木、手先肘木、 垂木・詰組式、拳鼻、隅尾	板軒・隅木、瓦葺形	空筒状か	
5	三峰寺塔	長楽県	一二二七年	石造、八角七重	三柱式柱、初重武人像	大斗、蛇腹形二段、一手 通肘木、手先肘木、詰組 式、隅尾垂木、初重は蛇 腹形三段のみ	板軒、隅木(初重なし)、瓦葺形	石柱蔵梯式	
4	水南塔	福清県	一二二七 年(修理) 一四一	石造、八角七重	礎盤、円柱(縦溝付)	大斗、蛇腹形・尾垂木 (初・三重)蛇腹形(一 段・丸桁・尾垂木(四 七重)	板軒、隅木(四七重)	空筒状	
3	(湧泉寺双塔) (千仏塔)	福州市	一〇八二年	陶製、八角九重	円柱、頭貫、腰貫	四手先、詰組	一軒垂木形、瓦葺形		小規模
2	東岩塔	莆田市	九九〇年	石造、八角三重	柱形なし	蛇腹形(初重三段、二重・三重二段)	板軒		未調査
1	(崇妙保聖堅牢塔) (烏塔)	福州市	九四一年	石造、八角七重	円柱、初重武人像	蛇腹形四段	ごく短い板軒、瓦葺形	石柱蔵梯式	

番号	名称	所在	建立年代	構造形式	軸部	組物	軒・屋根	内部構造	備考
12	六勝塔	晋江県	一三三九年	石造、八角五重	礎盤、円柱、虹梁形頭貫、方立・貫、繫虹梁	二手先、詰組、一手通肘木、丸桁、拳鼻	一軒垂木形、瓦葺形	心柱内廊式	
13	定光寺塔 (白塔)	福州市	一五四八年 改造	博・木造、八角七重	礎盤、円柱、柱頭飾	蛇腹形一段	瓦葺	空筒状	もと木造
14	瑞雲塔	福清県	一六〇六年	石造、八角七重	礎盤、三柱式柱、貫	大斗、蛇腹形二段、一手通肘木、手先肘木・詰組式、入八双形二段	板軒、瓦葺形	石柱蔵梯式	
15	不祥		不祥	石造、六角五重	柱なし	腕木	板軒	実心か	
16	安海白塔	晋江県	不祥 (明代か)	博造、六角五重	円柱	三手先、詰組式	瓦葺		

註 1 内部構造の呼称については『中国古代建築技術史』によった。  
2 未調査の遺構については『中国古塔清華』によった。

た十三基の遺構と、先にあげた中国の著作に載せてある遺構の三基について、細部の形式手法をまとめると右表のようになる。

以下、実見した主要な遺構について少し詳しくみてみよう。

## 二 各遺構の形式手法

### 1 湧泉寺双塔(千仏塔、福州市)

天王殿の前方左右に建つ同規模・同形式の塔で、高さ七メートル弱、陶製、八角九重、一〇八二年の製作という。軸部は四角の礎盤(初重のみ)・円柱・頭貫・腰貫を造り、正面・背面・両側面を仏龕とし、ほか四面には小仏の浮彫を付ける。組物は四手先状のものを詰組とし、斗には皿が付く。軒は一軒で垂木形を造り、屋根は瓦葺形とする。細部の造

りはやや粗雑で、納まりのおかしいところもあるが、木造の手法をよく写している。

### 2 崇妙保聖堅牢塔(烏塔、福州市)

五代の九四一年に建立された、石造の八角七重塔である。小石材を積んで造る積石式で、土台・円柱(初重は武人の立像)・台輪を造り、四段の蛇腹形の造り出しで軒を持ち出し、瓦葺形の屋根石を置く。土台には格狭間を刻み、円柱には胴張りを付ける。蛇腹形は下二段が角張っていて、これが組物の二手先を表し、上二段が軒を表しているのかもしれない。壁面には二面に入口(初重のみ一面)を設けるが、その位置は奇数階が正面と背面、偶数階が両側面となる。ほか六面(初重のみ七面)には仏龕を設けており、仏龕の楣は火灯曲線を造っている。屋根上は回り縁とし、卍崩しの浮彫を付けた高欄石を付ける。内部は、階段以外は



石を充填する石柱蔵梯式で、階段は矩折りに設けられ、上重へ上ると縁へ出て出口とは反対側の入口へ回ることになる。

### 3 水南塔（福清県）

石造の八角七重塔で、登ることが出来る塔としては規模が小さい。積石式で、軸部は土台上に礎盤・円柱を造る。円柱には縦溝が付き、初重と四重は壁面と同じく積石であるが、五重以上は一石で造られている。各重とも一面に入口、ほか七面に仏龕を設け、初重入口脇には立像を置く。入口と仏龕は、初重と三重はアーチ形であるのに対し、四重以上は入口は持送りを付けた楣式、窓は角形とする。組物と軒も初重と三重と四重以上では少し異なる。初重と三重では柱上に大斗を置いて大斗間に浮彫を入れ、蛇腹形と板軒形を三段に重ね、屋根上は水平で縁とする。この三段の造り出しは曲面が緩やかで、蛇腹形を一段とみるのか二段とみるのか判断し難い。大斗上には尾垂木を入れ、軒先近くにも同様のもの（初重は竜頭）を入れるが、これは隅木であろうか。この尾垂木と隅木には大仏様風の線形が付く。これに対し四重以上は、大斗間に浮彫がなく、一段の蛇腹形の先を桁を通して屋根石を置く。大斗上には手先肘木を出して桁のところに尾垂木を入れ、屋根石には隅木を入れており、尾垂木と隅木は一石で入八双形に造られている。内部は空洞とした空筒状で、壁に沿って狭いらせん階段を設けている。なお、大斗はすべて斗尻が広がっており、皿斗に近い。

このように、水南塔は初重と三重と四重以上との手法が異なり、四重以上には後補の手が加えられていることも考えられる。建立年代について

では、一二七年初建、一一四一年重修と伝えるので、四重以上は一一四一年の修理によるものであろうか。なお、各重の大斗・尾垂木・仏龕像、初重の軸部足元・立像などが他と石質を異にしており、この点にも疑問がある。

### 4 三峰寺塔（長楽県）

一二七年に建立された、石造の八角七重塔である。二重基壇上に建ち、基壇嵌石には格狭間状の浮彫を刻む。積石式で、初重と二重以上との手法が少し異なり、初重は柱の代りに武人立像を立て、台輪形の上の三段の蛇腹形を造って軒を出す。二重以上は断面が三弁からなる三柱式とし、柱上に大斗を置き、蛇腹形を二段としてその間（一手先）に通肘木を通す。大斗上には手先肘木と尾垂木を二手出すが、柱間の中間にも一手だけ手先肘木を出しており、控めながら詰組の形式をとる。軒は一軒の板石として隅木を出す。斗は斗尻が広がり、尾垂木には大仏様風の線形を付けており、下段尾垂木と二手先肘木、上段尾垂木と隅木がそれぞれ一石で入八双形に造られている。二手先と一手先の違いはあるものの、水南塔の四重以上と同じ手法である。屋根は瓦葺形とする。

壁面は、初重は正面に入口、両側面に仏龕を造るほかは小仏を刻み、下方と台輪形には浮彫を付ける。二重以上は二面を入口、ほか六面を仏龕とするが、入口のある面は奇数階と偶数階で九十度違う。入口は持送りを付けた楣式で、これも水南塔の四重以上と似ている。仏龕は火灯窓形で、二重以上は下方に蓮座状が、上方には龕座が付く。おそらく、もとは扉を設けていたのであろう。周囲は屋根上を回り縁とし、高欄を立て

てる。内部は入れなかつたので確かなことは分からないが、各重の入口の配置から見ると崇妙保聖堅牢塔と同じ構造形式と考えられる。

このように、三峰寺塔の形式手法は初重が崇妙保聖堅牢塔に似ているものの、二重以上は組物が二手先・詰組の木造手法に近い造りとなっている。

### 5 広化寺塔（釈迦文仏塔、蒲田市）

一一六五年に建立された、石造の八角五重塔で、今まで見てきた七重塔とは違って横幅のある比例を示している。柱などは一石で造られており、積石式ではなく組立式とでもいった構造である。軸部は反花座付の土台上に礎盤を造って三柱式の柱を立て、柱間には地覆・方立・貫などを造り、正面・背面・両側面へ入口、ほか四面に仏龕（初重は背面も仏龕）を設け、八面とも戸口・仏龕の両脇に仏・天王などの立像を彫刻する。

組物は柱上に大斗を置き、二段の蛇腹形を造って一手通肘木・丸桁を通し、大斗上には二手の手先肘木・尾垂木を、中間にも二手先肘木を出す。丸桁と通肘木には拳鼻を付けている。軒は一軒の板軒で、隅木を入れ、屋根は瓦葺形とする。尾垂木と拳鼻は大仏様風の線形付きで、下段尾垂木と二手先肘木、上段尾垂木と隅木はそれぞれ一石で造られ、入八双形をなしている。斗は斗尻が広がり、皿斗に近い。蛇腹形には、仏像・花葉・雲などの浮彫を付ける。初重基壇には雲文を刻んだ高欄を廻らす。これは全て新材である。二重以上は屋根上を縁とするが、高欄はない。相輪は石造のものを立てるが、近年に整備したものらしい。内

部は空筒状とされているが、確認はしていない。

この塔は柱が三峰寺塔と同じ断面形であるが、一石で造られている点が異なり、柱間装置もより木造の手法に近い。組物も三峰寺塔と同じ形式ではあるが、より二手先に近い。

### 6 崇福寺応唐塔（蒲田市）

宋代に建立された小規模な石造、八角七重塔で、各重ごとに軸部・組物・軒屋根を数石から造っていて、内部に空間がない実心式である。軸部には、三柱式の柱、頭貫・方立、扉形と窓形（各重とも四面ずつ）が造り出され、縁には格狭間が刻まれている。柱上には皿斗状の大斗を造り、二段の蛇腹形・桁、手先肘木を造り出す。軒は一軒で、垂木形・隅木形を造り出し、屋根は瓦葺形とする。

この塔は柱を三柱式とし、組物を二手先式とするなど三峰寺塔・広化寺塔と似たところもある。軸部の造り出しはかなり詳細で木造の手法をよく写しているが、組物・軒は部材が大きすぎて、各部の釣り合いが取れていない。相輪は石造で、四輪の上に宝蓋を上げているが、一部欠失しているのかもしれない。

### 7 瑞雲塔（福清泉）

石造の八角七重塔で、建立年代は一六〇六年と明代に下るが、形式手法は三峰寺塔・広化寺塔の流れを汲んでいる。広化寺塔と同じく組立式ともいべきもので、狭い基壇上に礎盤を置いて柱を立て、貫形を造る。柱は三柱式であるが、広化寺塔などとは違って三弁が同じ大きさではない。組物は柱上に大斗を置き、二段の蛇腹形を造ってその間に通肘木を

通し、大斗上に入八双形・大斗・入八双形と重ね、中間には二個所に一手先の肘木と二手先の腕木を出している。基本は三峰寺塔と同じであるが、隅では尾垂木と手先肘木・隅木との区別が付かない入八双形になっていること、一手先にも大斗を置いていること、平では二手の手先肘木が腕木状になっていることなど、本来の形式を忘れて退化したものになっている。軒は一段の板軒とし、屋根上は縁にして高欄を回す。七重の屋根には相輪ではなく、石造の宝珠を上げている。

柱間は、初重は正面を入口、ほか七面を仏龕、二重以上は二面を入口、ほか六面を仏龕としており、入口の向きは奇数階と偶数階で異なる。これは崇妙保聖堅牢塔や三峰寺塔と同じで、内部の造りも同じ形式である。

#### 8 開元寺東西塔（泉州市）

開元寺の東西両塔は、ほぼ同じ規模の石造八角五重塔で、構造形式もほとんど同じであるが、細部の手法が少し異なる。

西塔（仁寿塔）は一二三七年に完成したもので、基壇上に礎盤を置いて円柱を立て、柱頭は頭貫でつなぐ。頭貫は側面の膨らんだ太鼓形の断面で柄状の木鼻が付き、柱際には持送りが入る。柱間には貫・方立形を造り、各重とも四面にアーチ形の入口、残る四面に仏龕を造っているが、入口と仏龕のある面は奇数階と偶数階で四十五度ずれる。入口・仏龕の両脇には仏像の浮彫が付く。

組物は二手先、詰組で、一手には蛇腹形軒支輪を入れる。隅では隅行方向を含めて三丁の手先肘木が大斗上から出る。中間には初重・二重は二個所、三重以上は一個所の手先肘木を出して丸桁を支持する。隅では

尾垂木を出し、平では丸桁に拳鼻が付く。斗は皿斗で、肘木には笹繰りが付き、尾垂木と拳鼻は大仏様の線形をもつ。軒は一軒で隅木を入れ、垂木形を造り出し、屋根は瓦葺形とする。相輪は金属製で、宝輪は七輪であるが、日本のものに近い。

内部は、断面図によると厚い外壁に沿って廊下が回り、中心に太い心柱状の八角部がある心柱内廊式で、廊下部分には繫虹梁が入り、五重では梁上に大瓶束が立つ。

東塔（鎮国塔）は西塔の建立後一二五〇年に完成した。軸部は西塔とほとんど同じであるが、組物が少し異なる。二手先、詰組で、こちらは五重まで平の手先肘木が二丁出る。西塔と違う点は、隅斗栱で直角に出る手先肘木が大斗から離れ、平斗栱には大斗がなく、一手・二手とも手先肘木の下に禅宗様の絵様肘木が付くこと、一手先に通肘木が入ることである。隅に尾垂木、平には拳鼻が入り、共に大仏様の線形をもつことは西塔と変わらない。軒、屋根、相輪、内部は西塔と同じである。

このように、開元寺東西両塔は応化寺塔と同じ五重塔で、全体の形式や比例はよく似ているが、細部の手法はより木造に近く、内部の構造も異なる。

#### 9 六勝塔（晉江県）

石造、八角五重塔で、構造形式や比例は開元寺両塔とよく似ている。内部の各重の繫虹梁に一年ずつ異なる年紀があり、一三三九年に完成したことが分かる。柱は円柱で礎盤上に立ち、柱頭には頭貫が入る。頭貫が太鼓形断面で柄状の木鼻をもち、持送りが入る点は開元寺両塔と全く同

じである。柱間には貫・方立形を造り、アーチ形の入口と仏龕を各四面に設け、脇に仏像の浮彫を付けるのも変らない。

組物は少し違ったところがあって、柱上に蓮弁を刻んだ円盤状の大斗を置く。二手先、詰組は開元寺東塔と同じであるが、禪宗様の絵様肘木はなく、平の手先肘木は斗上にのる。隅で側柱筋と直角に出る手先肘木が隅大斗から大きく離れるのは、時代の差によるものであろう。尾垂木はない。軒・屋根は開元寺両塔と変らない。相輪は開元寺両塔とは違い石造で、中ほどに宝蓋が入る。縁には高欄石を立てるが、すべて新補材である。

内部は開元寺両塔と同じ心柱内廊式で、太鼓形断面の繫虹梁が入るが、五重に大瓶束を立てていない。

## 二 時代的変遷

福建省地方の古塔について全てを実見したわけではないが、先にあげた著作の写真なども参考にして、形式手法とくに軸部・組物回りを中心に時代順に通観し、時代的変遷を推測してみる。

この地方最古の遺構である崇妙保聖堅牢塔（九四一年）は、積石式で木造の細部はほとんどなく、軒・屋根は蛇腹形だけで持ち出している。わずかに木造の細部を表していると思われるのは、仏龕楣の火灯曲線、高欄の卍字崩し、土台の格狭間くらいであろう。組物を造らず蛇腹形だけとした塔としては、ほかに東岩塔（蒲田市、九九〇年）と関鎖塔（姑

嫂塔・万寿塔、一一三一〜六二年）があり、三峰寺塔（一一二七年）も初重だけはこの形式をとっている。東岩塔は八角三重塔で、蛇腹形は初重を三段、二重・三重を二段とし、軸部には柱形がなく、四面にアーチ式の入口を設けている。関鎖塔は八角五重塔で、各重とも蛇腹形を二段とするが、軸部には三柱式の柱を造り、柱上に大斗を置く点が崇妙保聖堅牢塔・東岩塔とは異なり、木造に近い手法である。三峰寺塔も柱を三柱式とするのは先に見たとおりである。こうしてみると、蛇腹形だけで軒・屋根を持ち出すのが石造塔本来の形式手法であり、初期の遺構に用いられたものと思われる。なお、関鎖塔では壁面に鳥居形を組んで蛇腹形を受けているところがあるが、これは後世の補強であらうか。

柱を円柱ではなく三柱式の断面とするのは、三峰寺塔・関鎖塔のほか広化寺塔（一一六五年）・崇福寺塔（宋代）にみられ、これと似たものとしては円柱に縦溝を付けた水南塔（一一二七年）、やや形の崩れた瑞雲塔（一六〇六年）がある。この三柱式の柱は、保国寺大雄宝殿（浙江省寧波市、一〇一三年）にみられる「爪陵柱」とよぶ十弁形の柱などと関連するものであろうか。

水南塔の創建時の部分と考えられる初重〜三重では、組物は蛇腹形としながら柱上に大斗を置き、尾垂木を入れている。後補と思われる四重以上は蛇腹形の上に丸桁を通し、尾垂木を入れ、軒は板軒として隅木を入れていく。これらは従来の蛇腹形を踏襲しながら、木造の手法に倣って尾垂木や丸桁、あるいは軒の隅木を加えたもので、木造手法の要素が少ない初重〜三重の方が古式であることはいままでもなからう。三峰寺

面は長方形断面)。そのほかの塔・堂は長方形断面のものである。日本は手先肘木を入れて詰組とし、広化寺塔ではさらに拳鼻が加えられる。両塔とも蛇腹形が二段でその間に通肘木を加えるなど、三峰寺塔に丸桁はないものの木造の二手先組物により近い手法であり、水南塔の四重以上と同じく水南塔の初重と三重に続く手法といえよう。ただし、尾垂木は手先肘木・隅木と一体になって入八双形になっている。このほか、天皇寺仙塔（連江県、宋代）にも似た手法がみられる。天皇寺仙塔は石造、八角形平面で現在は二重までしかないが、軸部は柱を方柱とし、組物は蛇腹形二段にして一手通肘木と丸桁を僅かに造り出している。柱上には太鼓形をした大斗状のものを置き、入八双形が二段に入る。この入八双形は、三峰寺塔・広化寺塔のものに比べると、尾垂木と手先肘木または隅木が一体化したとは思えない、退化したものになっている。

ところで、今まで見てきた遺構のうち広化寺塔・崇福寺塔・天皇寺仙塔の三塔以外は、柱形を造り出してはいるものの、壁面と同じ大きさの石を積んで造っており、構造的には組積造であることに変わりはない。しかし、小規模な崇福寺塔を別にすると、広化寺塔・天皇寺仙塔では柱を縦の一石造りとしていて、軸組構造的な要素も入ってきている。さらに、広化寺塔では壁面も積石式ではなく、大きな石から地覆・腰貫・内法貫・方立などを造っている。このような構造的にもより木造に近い手法は、このあとの開元寺西塔（一二三七年）・同東塔（一二五〇年）・六勝塔（一三三九年）などでもっと進んだものを見ることになる。

開元寺東西両塔では円柱を太鼓形断面の頭貫でつなぎ、壁面は広化寺

塔と同じく貫や方立を造っており、頭貫には枘状の木鼻も付いていて、木造の手法を忠実に表している。六勝塔もほとんど同じであるが、壁面の貫・方立は積石式としており、材料を節約したものかと思われる。この三塔の組物は前述した三峰寺塔の二重以上や広化寺塔の手法がさらに進化したもので、木造とほとんど変わらない二手先の詰組形式をとって、隅で三丁、平で二丁の手先肘木が出る（ただし、開元寺西塔の三重以上は平が一丁だけ）。以前の蛇腹形はなくなり、一手目に軒支輪状のものが入り、一手通肘木（開元寺西塔にはない）・丸桁が通り、丸桁には拳鼻が付く。開元寺東塔では平の手先肘木下に絵様肘木が加わる。六勝塔は隅大斗が異形であるが、平の手先肘木下にも斗が入る。開元寺西塔に比べると、同東塔、六勝塔の順で隅の直角に出る手先肘木が隅行のものから離れていき、時代差を感じさせる。

以上のように、福建省の石造塔は初め（五代末と北宋頃）は石造本来の構造である組積造で組み上げられ、軸部上に蛇腹形の持ち出しを造って屋根を支持していた。その後（南宋頃）次第に木造の手法を取り入れるようになり、蛇腹形に斗・肘木・尾垂木・桁などが加わって組物らしくなる。軸部も柱などを一石で造り、軸組構造の要素が入ってきた。三柱式の柱はこの頃にみられる。

時代が下ると（元代頃）、木造手法や軸組構造の傾向はさらに進み、組物は木造とほとんど変わらない二手先・詰組となり、軸部は円柱に頭貫を組むようになった。もちろん、これら以外の形式手法をもつものもあるし、瑞雲塔のように明代でも南宋頃の形式を踏襲するものもあって、

一概に論じられないことはいうまでもない。

つぎに、内部構造についても少しまとめておこう。崇妙保聖堅牢塔・三峰寺塔・瑞雲塔は積石の塊りの中に狭い階段が設けられている石柱蔵梯式である。階段は矩折りで各階交互に設けられていて、上階へ上ると外へ出て縁を半周し、反対側の入口から逆方向の矩折りの階段を上る。水南塔・定光寺白塔は厚い壁の内部が空洞になっている空筒状で、らせん状に階段が設けられている。階段は水南塔が石造、定光寺白塔が木造である。実見していないが、広化寺・関鎖塔もこの方式という。小規模な崇福寺塔は日本の石造塔と同じで、これを実心塔とよんでいる。開元寺兩塔・六勝寺塔は厚い外壁と太い心柱状の部分との間に八角環状の廊下がある心柱内廊式で、六勝塔でみると、階段は鉄製のものが廊下に設けられている。

『中国古代建築技術史』では構造発展過程として、実心塔——石柱蔵梯式——空筒状——心柱内廊式の順としており、実心塔を除いては遺構がほぼその時代順に並ぶ。しかし、実心塔については、規模の大小に係するものであり、時代的変遷にはあまり関係しないのではなからうか。なお、開元寺兩塔・六勝塔では各階の廊下に繫虹梁を入れており、心柱内廊式は内部も木造に近い構造といえる。

#### 四 日本の建築様式との比較

最後に、福建省地方に現存する遺構には、日本の大仏様の要素がどれ

だけ認められるのか、この点についていままで見えてきた古塔のほかに二、三の仏堂も加えて検討してみたい。木造の細部をもつもののうち、塔の遺構では、十一世紀の湧泉寺千仏塔、十二世紀の水南塔・三峰寺塔・広化寺塔のほか、正確な年代は分からないがほぼ同じ頃の崇福寺塔、時代は少し下るが木造の細部を最も多くもつ十三世紀の開元寺兩塔、十四世紀の六勝塔も加える。仏堂としては、重源が目にした可能性も考えられる華林寺大殿（福州市、九六四年）と元妙観三清殿（蒲田市、一〇一五年）を取り上げる。華林寺大殿は桁行三間、梁間四間、入母屋造で、近年解体修理が行われ整備されている。元妙観三清殿は後世の改修・拡張があつて不明な点も多いが、桁行三間、梁間四間、切妻造であつたろうと思われる。以下、軸部・組物・軒・架構等について順を追って見ていくこととする。

##### 1 軸部

柱は、塔では十二世紀のものが三柱式断面または縦溝付である。日本の大仏様の遺構では、花卉形や集成材の柱は使われていない。仏堂の方は二棟とも円柱で、華林寺大殿には明瞭な胴張りがある。日本の大仏様にも僅かな胴張りがあるが、華林寺大殿のそれは法隆寺金堂などに近い。なお、胴張りは崇妙保聖堅牢塔にも認められる。また、塔には柱下に礎盤を入れたものが多いが、堂にはない。日本では礎盤が禅宗様の手法であることはいうまでもない。

頭貫は開元寺兩塔と六勝塔が側面に膨らみをもつもので、杓状の木鼻が付く。華林寺大殿でも、正面には同様の頭貫が使われている（ほか三

塔の二重以上や広化寺塔も水南塔の四重以上と似ているが、三峰寺塔の大仏様は頭貫は違うが、梁は断面が円または側面に膨らみをもつものであるから、これと似ていることになる。

## 2 組物

塔では、七塔すべてが柱上に組物を組んでおり、しかも、詰組またはそれに近く、明らかに詰組でないのは水南塔と崇福寺塔だけである。華林寺大殿の正面と玄妙観三清殿も詰組であって、日本の大仏様の大きな特徴である挿肘木はみられない。詰組の場合、日本の禅宗様では必ず台輪を用いているが、福建省の場合は台輪を用いず、代わりに頭貫を太くして中間の斗栱を置いたものらしい。

手先は、塔の場合は湧泉寺千仏塔が四手先、ほかは水南塔の四重以上を除いて二手先または二手先風である。華林寺大殿・玄妙観三清殿は四手先で、これは通肘木を二手先にしか通さず、三手・四手を尾垂木で持ち出す方式で、『营造方式』などにみられる宋の様式とは少し違い、仏光寺大殿（山西省五台山、八五七年）などに近い。

斗の形状は、塔・堂とも皿斗あるいは斗尻が広がった皿斗に近いもので、この点は日本の大仏様に似ている。肘木は日本の和様のものが多いが、開元寺兩塔・六勝塔や華林寺大殿では笹繰りを取っている。玄妙観三清殿は下端に幾つかの角ができる、『营造方式』にいう「四弁巻殺」式のものである。

尾垂木は、塔では水南塔・三峰寺塔・広化寺塔・開元寺兩塔の隅にあり、いずれも大仏様線形に似た形をしている。水南塔・三峰寺塔・広化

寺塔では、この尾垂木が手先肘木や隅木と一石で造られ、入八双形をなしているが、これは東大寺南大門・同鐘樓の入八双形隅木と酷似している。華林寺大殿の尾垂木も大仏様線形に近いが、玄妙観三清殿のものは違う。

丸桁は七塔すべてが長方形断面のもので、華林寺大殿も丈の高い長方形で斗が直接かみ込んでおり、日本でいえば鎌倉地方系の禅宗様に近い。玄妙観三清殿は円形断面のもので、実肘木が入っているから、これだけは大仏様に近い。広化寺塔・開元寺兩塔・六勝寺塔では丸桁に拳鼻が付き、これはまさに大仏様のものである。開元寺東塔ではさらに一手・二手の手先肘木下に持送り状のものが入っているが、これは逆に禅宗様の木鼻そのものといえる。

以上のように、組物は基本的には禅宗様の詰組であって、挿肘木は見当らない。細かい点では、皿斗や尾垂木・拳鼻の線形が大仏様であり、大仏様の入八双形隅木の原形とみられるものもあって、大仏様の要素も多い。しかし、肘木に笹繰りをもつものがあり、一例ではあるが禅宗様の木鼻も一緒に使われているなど、両者の要素を明確に分けて考えるには無理があるように思われる。

ところで、挿肘木と遊離尾垂木は大仏様における大きな特徴であるが、これまで見てきた塔・仏堂には両者とも見当らない。組物はすべて柱の上に組まれており、多くは詰組として丸桁の中間支点を造っているから、挿肘木とはならず、遊離尾垂木を入れる余地はない。ここに挙げた以外では、崇福寺大殿（明代）など後世の遺構には挿肘木に近い手法がみら

れるものもあるが、日本の大仏様ほど明快ではない。一方、遊離尾垂木の方は全くみられないようである。

### 3 軒その他

軒については、塔で垂木形を造り出しているのは湧泉寺双塔・崇福寺塔・開元寺両塔・六勝塔で、いずれも出の少ない一軒とし、垂木は扁平である。垂木配置については、八角形ということもあってほとんど指垂木に見える。仏堂では、華林寺大殿が一軒、隅扇垂木、垂木はやはり扁平で、端隠板を打っている。玄妙観三清殿も後世拡張された部分で見ることがあり同様であり、ほかの後世の堂でもほとんどが同じ形式である。したがって、垂木が扁平である点を除くと、日本の大仏様と変わらない。入八双形隅木の原形ともみれるものがあることは前に述べた。

架構については、塔では開元寺両塔・六勝寺塔に頭貫と同様の膨らみのある虹梁がみられ、華林寺大殿・玄妙観三清殿でも虹梁はやはり日本の大仏様と似たものが使われている。

以上をまとめてみると、福建省の五代末から元代にかけての塔と仏堂において、大仏様もしくはそれに似た手法で広く用いられているのは、虹梁・木鼻の縁形・皿斗・一軒隅扇垂木・端隠板・入八双形隅木くらいである。貫はもちろん使われているが、これは大仏様、禪宗様どちらともいえるものではない。反対に禪宗様もしくはそれに近い手法としては、組物の基本構成と詰組、礎盤がある。そして、大仏様の最も特徴的な遊離尾垂木は全くみられず、同じく挿肘木も使われていない。少なくとも、大仏様の原形といきれる遺構は見当らないことになる。

### 註

- (1) 傳造二基のうち、定光寺白塔は九〇四年木造で創建され、一五四八年現状のように傳造に改築されたもので、内部には木造部分が残る。
- (2) 『中国古塔精華』によると石室寺塔（蒲田市、明代末期）がそうで、現在は塔身部分だけが残る。
- (3) 形式の分類については『中国古塔』（羅哲文）による。
- (4) 『中国古代理建築技術史』による。
- (5) 保国寺大雄宝殿では、粗い胡麻穀決りともいえる十弁式の柱が使われている。『中国古代理建築技術史』によると、この柱は一木造りの爪陵柱と、幾つかの材を組み合わせた貼梭柱・四拺梭柱とがある。また、開元寺大雄宝殿（泉州市、一三八九年）にも同じような石造の柱がみられる。

今回の調査は浅川滋男氏（奈良国立文化財研究所）と二人で行ったもので、同氏にはいろんな面でお世話になった。末筆ながら、感謝の意を表します。

（国立歴史民俗博物館情報資料研究部）



## Ancient Pagoda in Fuchien Province, China

HAMASHIMA Masaji

Fuchien Province in China is considered to have very deep connections with the Daibustu-yo style of architecture which was introduced to Japan on the occasion of the reconstruction of Tōdaiji Temple in the early Middle Ages, and which exerted a strong influence on Japanese architecture thereafter. The author looks through the structural types and styling techniques of ancient Pagoda erected from the 10th to 17th centuries and still remaining in Fuchien Province. He also looks into their relationship with the Daibustu-yo together with other Buddhist structures remaining from the 12th century or earlier.



写真2 同内部



写真1 崇妙保聖堅牢塔



写真3 同二重

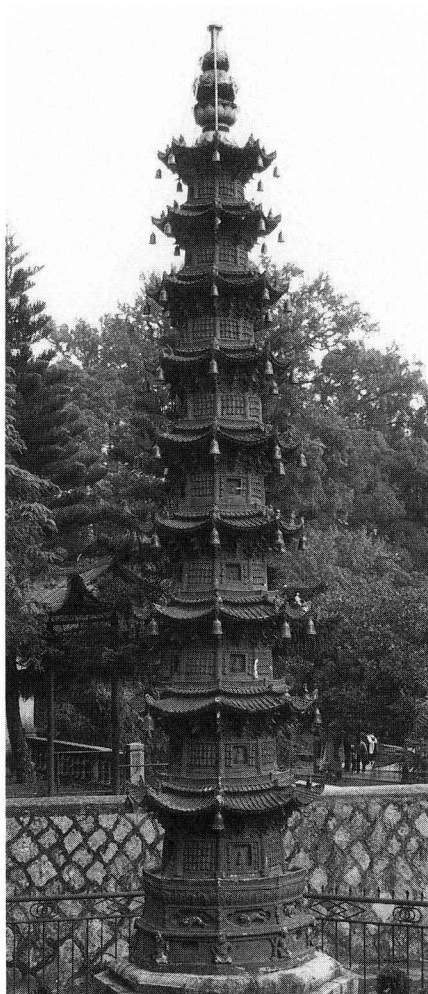


写真5 湧泉寺塔



写真4 東岩塔



写真6 同二重



写真8 同初重～三重



写真7 水南塔



写真9 同四重細部



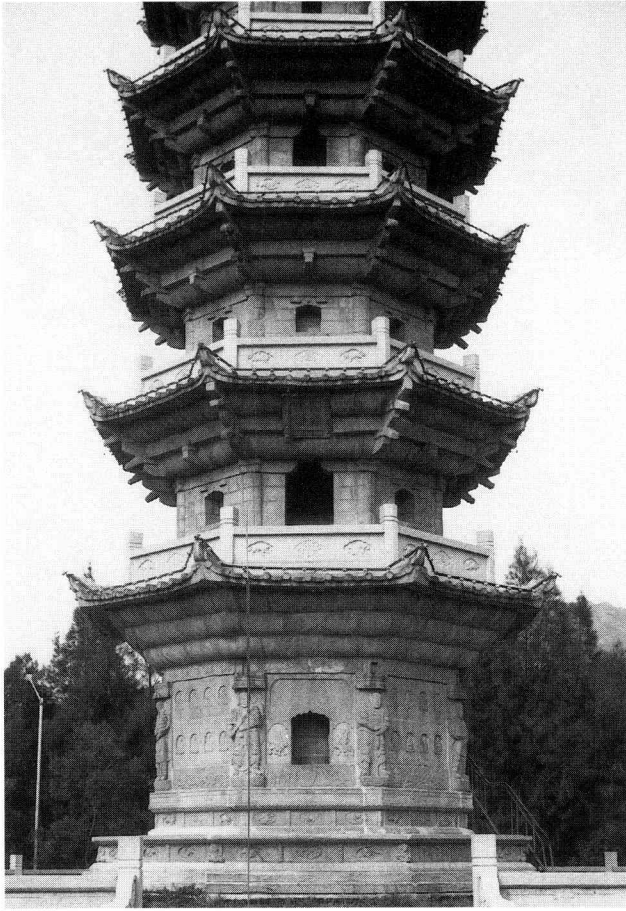


写真11 同初重～四重



写真10 三峰寺塔

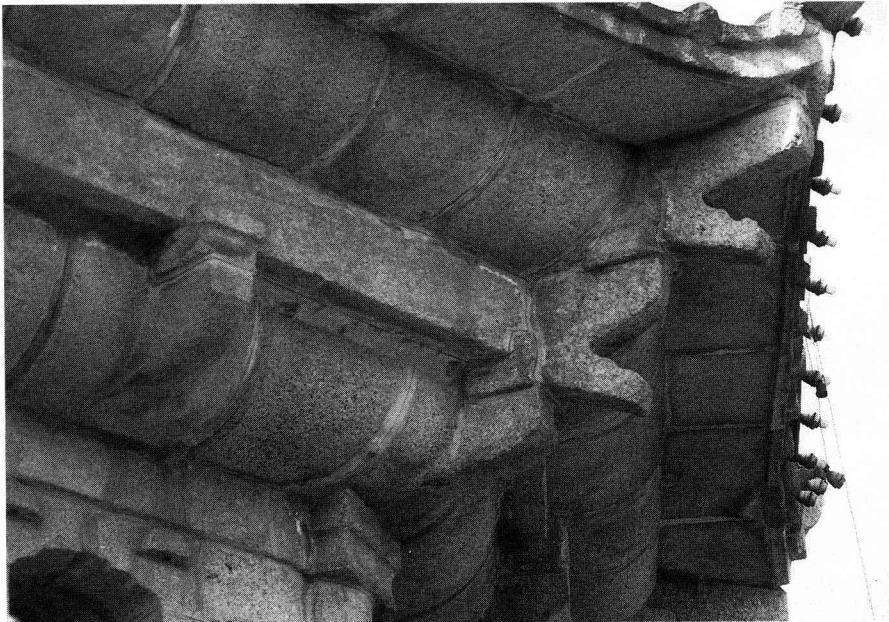


写真12 同二重細部

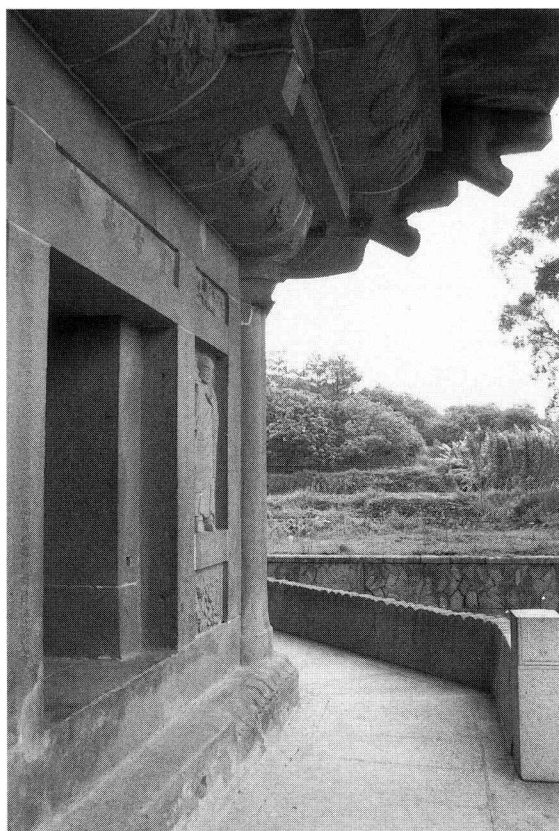


写真14 同初重

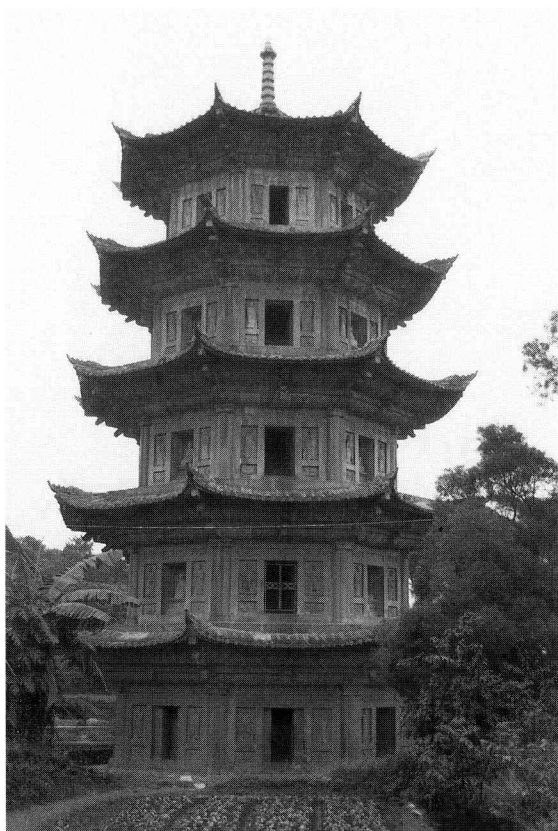


写真13 広化寺塔

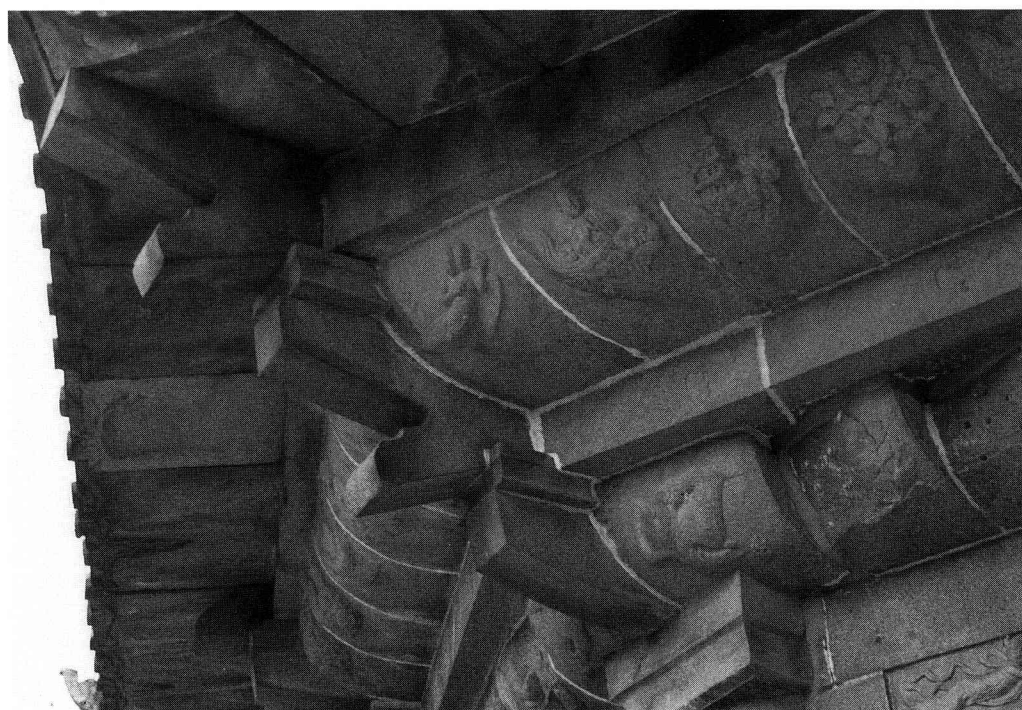


写真15 同初重細部



写真16 崇福寺塔



写真17 同二重



写真18 関鎖塔

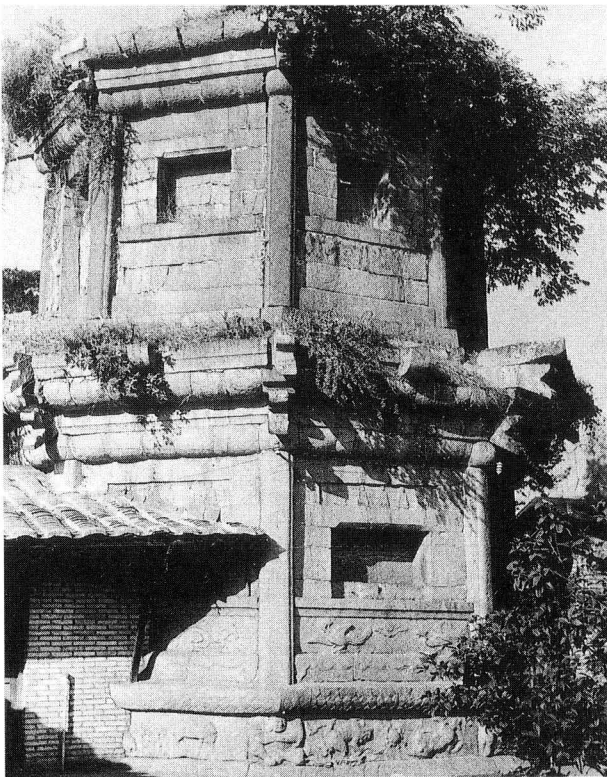


写真19 天皇寺仏塔



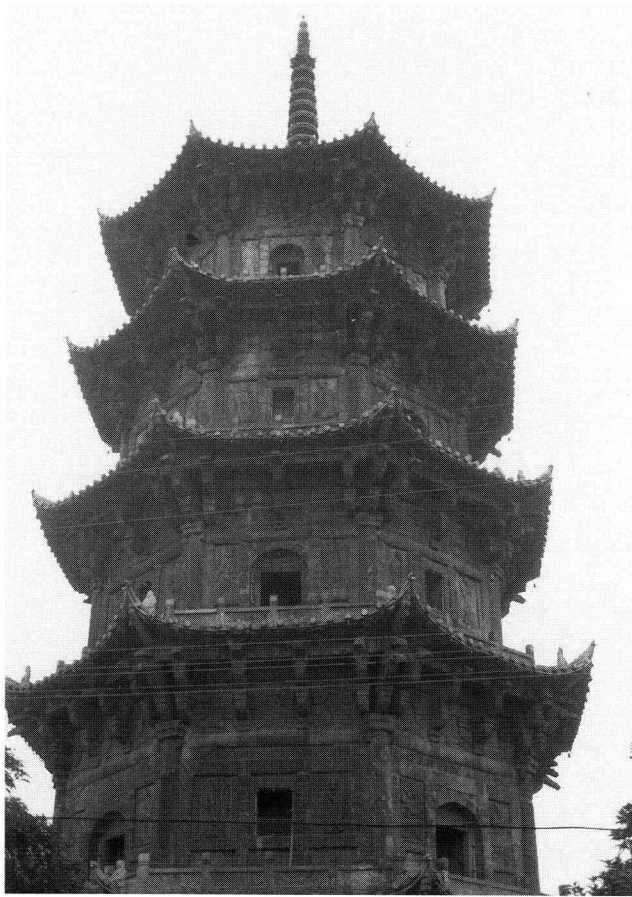


写真20 開元寺西塔

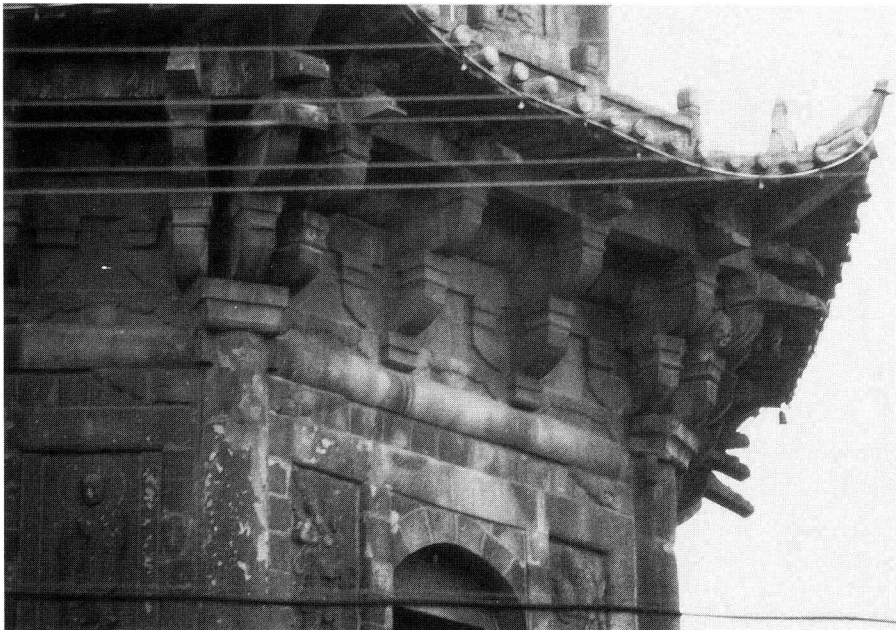


写真21 同二重



写真23 同初重



写真22 開元寺東塔

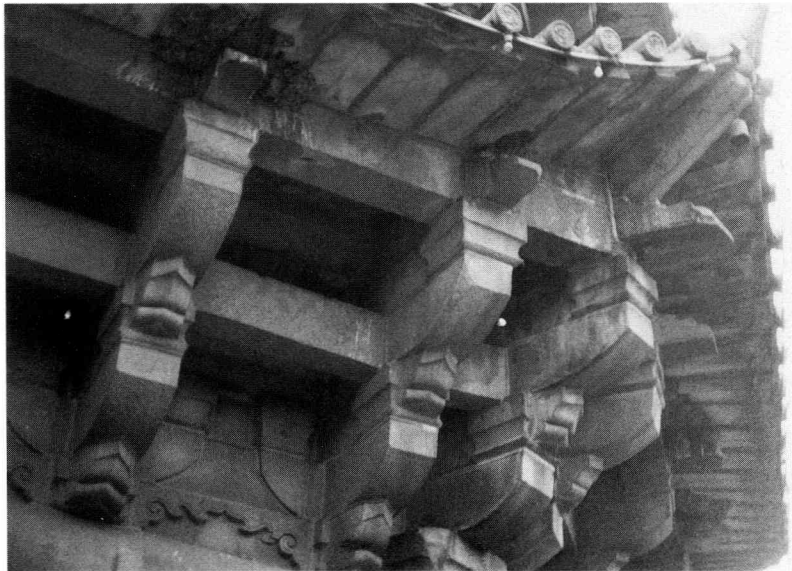


写真24 同初重細部



写真26 同内部

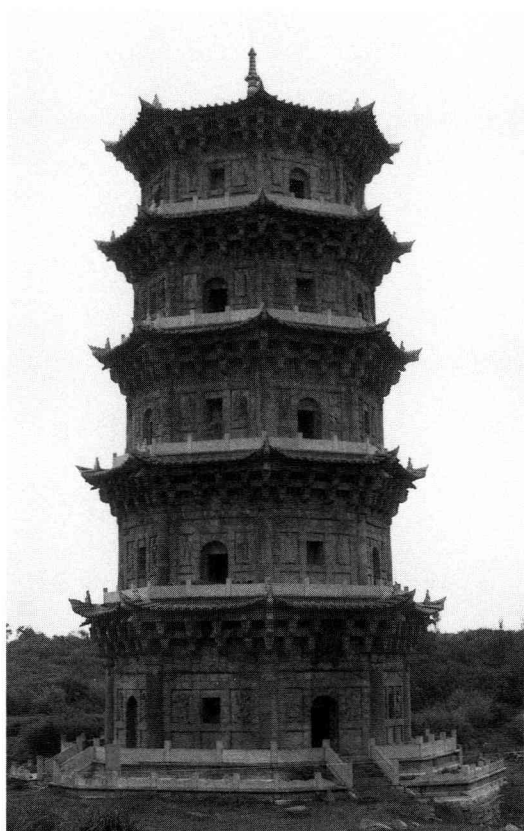


写真25 六勝塔



写真27 同初重



写真28 定光寺白塔



写真29 同内部





写真31 同初重・二重

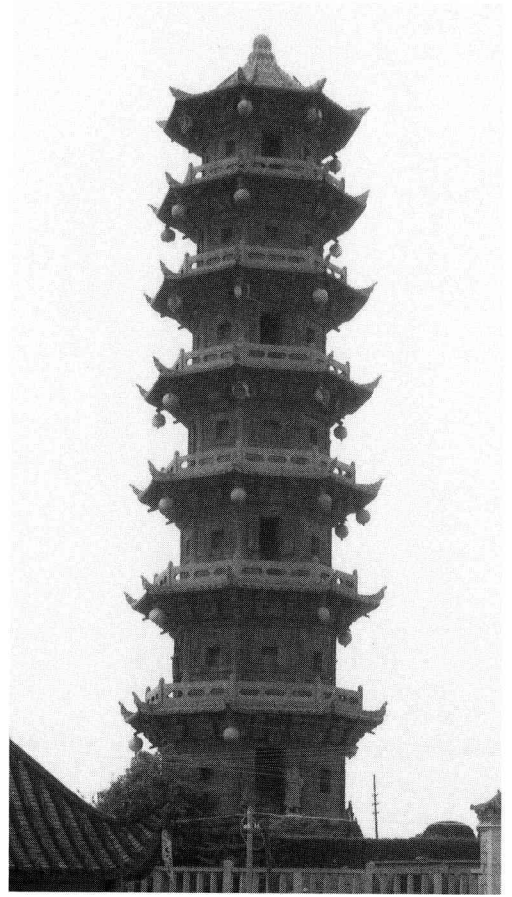


写真30 瑞雲塔

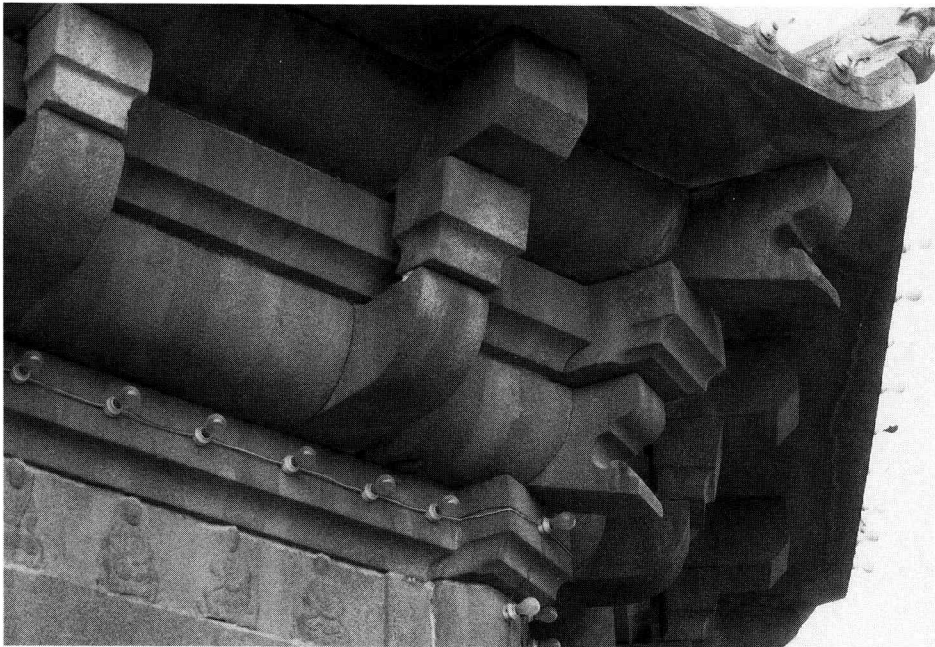


写真32 同初重細部

写真34 安海寺白塔

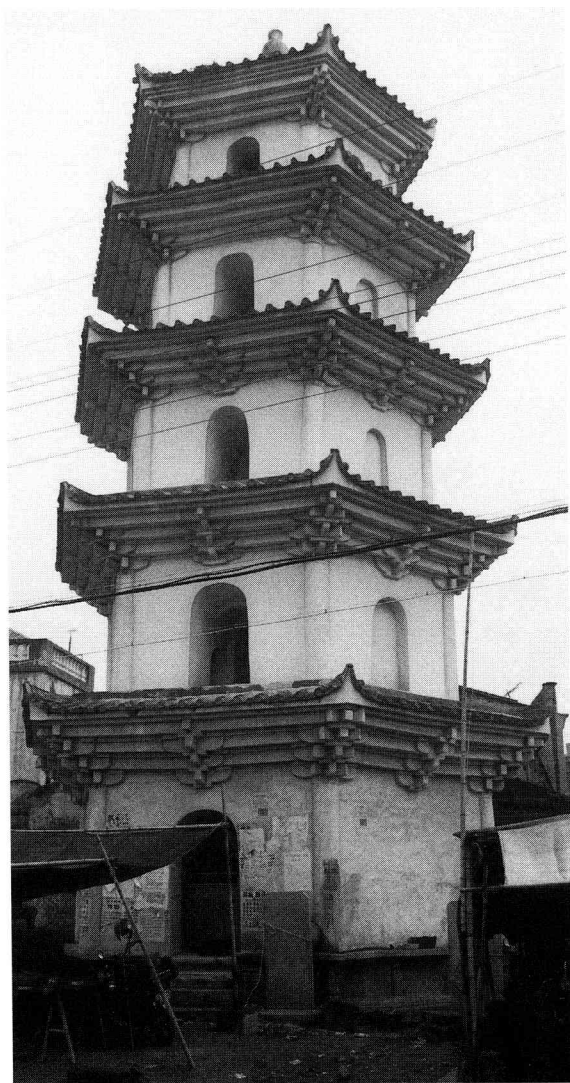


写真33 六角五重塔  
(名称不祥)



写真35 華林寺大殿



写真36 同部分



写真37 同内部





写真38 玄妙観三清殿組物



写真39 同架構